

原 著

保育者養成のための Easy Art Education

—『保育総合表現』における「劇創作」の「ツミキ・ワーク」を用いた 大道具・小道具制作の一分析—

鷺崎 公彦*

<要 旨>

本論は、「保育者養成のための Easy Art Education」の枠組みを構築する第一歩として、2019年度『保育総合表現』における「劇創作」の大道具・小道具制作で実施した「ツミキ・ワーク」の学生成果物について分析と考察を行う。

「ツミキ・ワーク」とは、「対象物を再現する造形表現」の制作方法として、近代絵画の父ポール・セザンヌの絵画理論をもとに、知育玩具「積み木」に応用した手法である。

研究対象を「ツミキ・ワーク」の3つのSTEPで分類し、成果物や制作過程に見る特徴及び特性を分析、考察し、その有用性を探る。また、STEP2の作品を「共同制作」と「個人制作」でも分類し、共通点と相違点から「ツミキ・ワーク」の可能性を捉える。

その結果、STEP2・3において、美しさを感じ取る、観察から発見する「感性」や、独自性を表す「個性」が確認できた。また、共同制作と個人制作の「共通点」から4つの利点を、「相違点」から「公平性の高さ」「自由度の高さ」を明らかにした。

キーワード：保育者養成、造形表現、再現、ツミキ・ワーク、Easy Art Education

I. はじめに

1. 研究の目的

保育者を目指す短期大学生は、2年間の短い保育者養成（保育士養成及び幼稚園教諭養成）教育課程の中で、保育現場の即戦力となるべく様々な知識や技術を習得しなければならない。なかでも「造形」分野は、才能・センスの優劣に伴う劣等感、或いは精神的・肉体的な力を要する重労働等の「先入観」により敬遠され易い傾向にある。保育者養成における造形教育において、個人の資質を拠り所とせず、いかに負担なく効率的で効果的な学びある遊び（造形遊び）によって、基礎から応用までの造形力を養い、「成功体験」を提供し得るかが今後も重要な課題となる。

本論は、「保育者養成のための Easy Art Education」の枠組みを構築する第一歩として、2019年度『保育総

合表現』における「劇創作」の大道具・小道具（以下、大・小道具と表記）制作で実施した「ツミキ・ワーク」の学生成果物について分析と考察を行う。

「ツミキ・ワーク」とは、「対象物を再現する造形表現」の制作方法として、「自然を円筒形と球形と円錐形によって扱う」¹⁾と説いた、近代絵画の父ポール・セザンヌ²⁾の絵画理論の一つをもとに、知育玩具「積み木」に応用した筆者設計の手法である。

この手法を以下の3つのSTEPで構成した。

STEP1 円筒形・球形・円錐形等の幾何学形体の立体物を複数個制作し、その組み合わせから「どのような対象物が再現できるか」を考える方法。

STEP2 対象物が「どのような幾何学形体の組み合わせからできているか」を自分なりに考え、解体・再構築して再現する方法。

* 西南女学院大学短期大学部保育科

STEP3 単純な形の組み合わせでは捉え難い対象物に対し、幾何学形体から幾何学形体を「減法」して再現する等の応用的方法。

『保育総合表現』は、「学生の主体的な活動」を指導方針とするため、必ずしもその順を追う学習計画は求められない。ところが、2019年度の成果物ではSTEP2・3による作品が複数件散見された。また、STEP2では「共同制作」と「個人制作」の両活動で展開され、成果を上げている。これらの写真データをもとに、「ツミキ・ワーク」の有用性を捉えることを研究目的とする。

2. 研究の背景

A 大学短期大学の保育科では、2年次後期に『保育総合表現』という選択授業が履修できる。この授業は、音楽・身体・言語・造形等を統合した表現活動の創造を通して、「将来に役立つ資質を養うこと」「表現の喜びを子ども達に伝えること」を目的としている。また、共同作業を通じて、「チームワーク及びコミュニケーションの力を育むこと」も目標とした。筆者は当授業の造形担当教員である。

2019年度は、全30回の授業で構成され73名の学生が受講した。学生達を3つのグループに編成し、3つの演目を創作している。そして、大学のホールに幼稚園・保育所の子ども達を招き、発表会『シオンの丘「子ども劇場」』を開催した。

この数年間での演目は、「劇表現」がその全てである。智原江美らが京都市内及び京都府下南部の幼稚園・保育所の計200園を対象に行ったアンケート調査では、保育現場における音楽・身体・言語・造形の4領域の重複した活動内容は、発表会・劇・オペレッタのように「演じて発表するもの」であることを明らかにした。³⁾ この調査結果は、将来に生かせる総合的な表現活動とは何かに対し、「劇表現」とした学生達の判断の妥当性を保証していると言える。

一括りに「劇表現」と言っても、演奏・踊り・演技に特化した各形態でその方向性は異なるが、大・小道具の制作活動が必要となる。これまでの傾向を鑑みると、抽象的表現はほぼ見られず、その大部分は物語を補助する「具体的な対象物を再現する造形表現」という共通点が見られる。松下明生は、「具体的に何かを描画するという課題（演目）については、授業者（保育者）にとっても被体験者（児童・生徒）も、苦手意識を高めてしまいがちで、悩みの種として扱うことが少なく

ない。」⁴⁾と指摘したが、立体造形でも同じことが言える。

保育者養成における造形教育において、「対象物を再現する造形教育」に関わる先行研究は少ない。過去の研究を概観する限り、その背景には3つの要因があると考えられる。第1に、島田由紀子⁵⁾が指摘した幼稚園教育要領等との目的や目標の不一致に関する「メソッドによる指導法の問題」。第2に、降旗孝⁶⁾が指摘した「上手・下手」等の境界線なき教育活動の推進に関する「学生の意欲・苦手意識の実態」。第3に、長谷川悦子⁷⁾や、花田嘉雄・樋口健介⁸⁾が指摘した楽しさや喜びを重視した、資質を問わない造形活動に関する「プロセスを重視した造形教育への傾き」である。

これらの指摘に注目し、2019年度『保育総合表現』の3演目の中から「ツミキ・ワーク」を用いて大・小道具の制作活動を行った、グリム童話「小人とくつや」⁹⁾を原案とする劇作品を取り上げ、保育者養成という特化した学習対象者への有用性を事例から導き出す。

なお、当演目は内容が一部編集されている。その一つに、クライマックスを大道具で魅せる演出を筆者が提案し、学生間の話し合いにより「大きなケーキ」となったことを補足しておく。

3. 研究の対象

2019年度『保育総合表現』の1演目「こびとくつやさん」での大・小道具の学生成果物、「共同制作」による作品1件（写真1. 大きなケーキ）、「個人制作」による作品4件（写真2～4. とんかちA～C）、（写真5. くつ）の計5件の写真データを研究対象とする。

4. 研究の方法

上記の研究対象を「ツミキ・ワーク」の3つのSTEPで分類し、成果物や制作過程に見る特徴及び特性を分析、考察し、その有用性を探る。また、STEP2の作品を「共同制作」と「個人制作」でも分類し、共通点と相違点から「ツミキ・ワーク」の可能性を捉えることを研究方法とする。

II. 分析

1. 「ツミキ・ワーク」の基本的制作工程

「ツミキ・ワーク」では、「作ろう・飾ろう」と題し

た制作工程を設けている。これは、第1に本体を作る、第2に飾り付けするという分割式的制作方法である。その代表的な創作物の一つに「クリスマス・ツリー」が挙げられる。

「クリスマス・ツリー」とは、一般的に常緑針葉樹のモミの木で本体を作り、ツリートップ等の様々な装飾品を飾り付ける立体物である。これと同様に、段ボールの廃材で本体を作り、絵の具や色紙で色付けたり、好みの品や素材を飾り付けたりする手法が「作ろう・飾ろう」の基本的な考え方である。

このような制作手順を踏む理由は2つある。第1に、「本体作りに集中すること」。第2に、「飾り付けを楽しむこと」である。この手法は、各工程の要点が分かり易く、造形分野に馴染みの薄い学生も自発的に取り組めると考えられ、また力仕事等の目安も分かり易いため、労力を要する作業も前向きに取り組めると考えられる。

なお、本体作りと飾り付けの各過程で、材料や道具の基礎的、応用的な知識及び技術の実技指導を徹底したが、発想・着想等については学生の主体性に一任している。

2. 「ツミキ・ワーク」のSTEP1

このSTEPは、「ツミキ・ワーク」の名称が示す通りに「積み木作り」を意味するSTEPである。「対象物を再現する造形表現」及びその初級編と言える。

造形表現に苦手意識をもつ者の第1の壁は、「頭の中に何も思い浮かばないこと」である。中野友三も『「想像の系」は教えられない』¹⁰⁾と指摘したように、1つ目の躓きがここにある。

さて、「対象物を再現する造形表現」のための「ツミキ・ワーク」であるが、STEP1での目標は対象物を再現することではない。ここでの目標は、「積み木を作ること」である。つまり、造形遊びの目的として「積み木作り」があり、遊びの一環として「対象物は再現される」のである。換言すれば、何を作るかを考えるのではなく、幾何学形体の組み合わせから「何が作れるかを考える方法」がこのSTEP1である。

2019年度『保育総合表現』では、STEP1での成果物は見られなかった。その要因は、「劇表現との相性」にあると考えられる。劇創作は基本的に脚本先行であり、大・小道具の制作に入る段階で対象物が決まっていることが通常である。思い浮かばないことに焦点を当てたSTEP1との「ねらいの不一致」がその原因と考えられる。しかし、大・小道具制作に携わった学生

の多くがSTEP2以上の成果を修めたことを鑑みても、STEP1での学習も不可能ではないと考えられる。

3. 「ツミキ・ワーク」のSTEP2

このSTEPは、セザンヌの絵画理論に最も近い「ツミキ・ワーク」の心臓部であり、『保育総合表現』での展開が最も期待されたSTEPである。また、「自分なりに考える」という要素が加わる点から「対象物を再現する造形表現」及びその中級編と言える。ここでは、演目の終幕を彩る大道具「大きなケーキ」、主要キャストの小道具「とんかちA・B・C」として創作された。

1) 「大きなケーキ」

「大きなケーキ」の大道具制作では、想像を膨らませ、イメージを固めるために以下の4つの声掛けを行なっている。

- ・「大きなケーキ」とは、どのような幾何学形体の組み合わせからできているか。個別で想像した形を全体で共有し、共通のイメージから対象物を再現すること。
- ・人間が大小の度合いを計測する手段には、手のひらサイズ・等身大等、「身体との比較」から測る方法がある。役者の身長を基準に対象物の大きさを考えること。
- ・2018年度の劇創作では、「ツミキ・ワーク」を用いて大道具「大きな木」を制作した。その「幹」に当たる円柱体をケーキの一部に再利用すること。(筆者の提案は学生達に受け入れられ、その最下段に流用された。なお、具体的なイメージが構想された後に助言を行なっている。)
- ・できる限りグループ全員で制作すること。

「大きなケーキ」の特徴及び特性として、最上段円柱体の寸法に見る「修正点とその経緯」から学生達の「感性」を読み取ることができる。

「大きなケーキ」の形を想像した学生達は、「ウェディング・ケーキ」のような形状を共通イメージとした。また、前年度作品一部再利用の提案を受け、それを最下段に流用し、全4段の円柱体の組み合わせから対象物を再現しようと考えた。なお、幅と奥行は、最下段の120cmΦを基準に、各段の比率が1:2:3:4となる30cmΦ・60cmΦ・90cmΦ・120cmΦとした。高さは、役者の平均身長160cm程度を基準に、全高を

区切りの良い200cmとし、それぞれ50cmとした。ところが、最上段円柱体の30cmΦ×50cmのみ「40cmΦ×40cm」に修正されている。

このような修正点が生まれた要因には、「形的美しさ」が挙げられる。計算式による制作案を完成させた学生達は、全体のバランスの中で30cmΦ×50cmの形が妙に細長く「美しくない」と感じ取っている。解決策に、30cmΦに揃え30cmにすると、不自然に小さくなり美しくない。一方、50cmに揃え50cmΦにしても、大きくなり美しく感じられない。その結果、表れた形が「40cmΦ×40cm」であった。数字上は、最上段のみ法則から外れているが、写真データを見る限り、学生達の覚えた違和感は弱まり統一感のある自然な形となっている。

造形表現において「美しさを感じ取ること」とは、「感性の側面」であると考えている。また、美しい作品を作りたいという「欲求」であったとも考えられる。ここでは、造形遊びを通して自分達なりに美しさを問い掛け、求める行為に「感性の表出」が見い出されるのである。

以上の事象が教員からの指摘ではなく、学生達の主体性から表れたこと、また「総意としての感性」であることを指摘しておきたい。

写真1. 大きなケーキ



表1. 円柱体の各寸法 (単位 cm)

	幅	奥行	高さ
最上段	40	40	40
上段	60	60	50
下段	90	90	50
最下段	120	120	50

2) 「とんかち」

「とんかち」の小道具制作でも、以下の4つの声掛けを行なっている。なお、個人制作での躓きを防ぐため、形が見る者に与える印象等の具体的な指標に関する助言も行った。

- ・「とんかち」とは、どのような幾何学形体の組み合わせからできているか。想像した形から自由に対象物を再現すること。
- ・歌・踊り・演技を妨げないよう、対象物の大きさは「半身以下」であること。100cmの定規を手にとって実演させ、実感を伴った体験からサイズ感を想像させている。
- ・「大きいと小さい」・「太いと細い」・「鋭いと鈍い」等の、形が見る者に与える印象について。
- ・演目で使用する役者本人が制作すること。

「とんかち」は、小人役の学生3名が各自で制作した。本論では、「A・B・C」と呼称する。ここでは、「A・B」の分析と考察を行い、「C」については、「共同制作」と「個人制作」の項で改めて見ていく。

「とんかち A・B」の特徴及び特性として、両作品の比率や色彩に見る「相違点とその意図」から学生の「個性」を読み取ることができる。

「とんかち」の形を想像した学生2名は、「頭」を円柱体、「柄」を直方体とする組み合わせから対象物を再現しようと考えた点で共通している。これは、とんかちの不要部分（装飾的部分）を省略し、必要部分（構造的部分）を強調した形と言える。ところが、両者の作品では「頭と柄の比率」が随分違う。「A」は頭が小さく、柄が長い。反対に、「B」は頭が大きく、柄が短い。この「比率の差異」により、前者は細身に格好良い印象を、後者は丸みを帯びた可愛い印象を見る者に与える。加えて、「色味の種類と数」もかなり違う。「A」は紫と淡いピンクの計2色。一方、「B」は黄・橙・

黄緑・淡いブルーの計4色である。この「色数の差異」によって、前者は落ち着いたクールな感じを、後者は明るく元気でキュートな感じを見る者に与えている。

このような相違点が生まれた要因には、「役柄の個性」が挙げられる。それぞれの小人役には役に合わせたイメージカラーが設定されており、自分自身が演じる配役の性格に沿った形や色を自分なりに考え、表現した。これらの作品は、同じ材料、同じ道具、同じ方法で制作されたが、写真データからは全く異なる雰囲気を見ることができる。

造形表現において「独自性を表すこと」とは、「個性そのもの」であると考えられる。また、自分らしく作品を作りたいという「欲求」であったとも考えられる。ここでも、造形遊びを通じて自分なりに自己の表現を問う掛け、求める行為に「個性の発露」が見い出されるのである。

以上の事象も教員からの指摘ではなく、学生の主体性から表れたことに注目したい。

写真2. とんかちA



写真3. とんかちB



表2. とんかちの各寸法 (単位 cm)

	幅	奥行	高さ
A (頭)	20	39	20
A (柄)	4	5	79
B (頭)	21	42	21
B (柄)	5	6	61
C (頭)	40	47	34
C (柄)	6	6	84

4. 「ツミキ・ワーク」のSTEP3

このSTEPは、STEP1・2と比べ若干難易度が高まるSTEPである。また、「思考力や応用力」を求める点から「対象物を再現する造形表現」及びその上級編、応用編と言える。ここでは、演目の主要な小道具「くつ」として創作された。

1)

「くつ」の小道具制作では、以下の3つの声掛けを行った。また、難易度を配慮し制作途中での積極的な声掛けも行なっている。

- ・「くつ」の基礎となる形とは、どのような幾何学形体でできているか。
- ・不要部分（破棄部分）と、必要部分（使用部分）を考え、幾何学形体の形で取り除くように対象物を

再現すること。

- ・ 僅かでも躓きを感じた場合には、速やかに質問・相談し、問題解決に努めること。

「くつ」の特徴及び特性として、作品の細部や作業の手順に見る「着眼点とその意識」から学生の「感性」を読み取ることができる。

「くつ」の形を想像した学生は、基礎となる形を直方体とした。これは、「減法する」というSTEP3で最も適正な、どのような形にも弾力的に対応できる基本的な形の一つと言える。また、その「甲」に当たる部位を再現するため、不要部分の形や位置、面積を思索した結果、直方体から三角柱のような形を取り除いた。加えて、「爪先」となる部位も一直線から三角形へ工夫されている。

このような着眼点が生まれた要因には、「形の気付き」が挙げられる。靴独特の形状を現実的に形作るため、学生は全体から細部までをよく観察し、その発見から「爪先」を三角形で表すこと、「踵」となる部位の角を取り除くこと等を試みている。その姿勢や態度は、作業序盤から見ることができた。この学生は、段ボール箱の山の中から3辺の比率が最も適当なものを探し、同形のを2つ準備している。また、教員と意見交換を行いながら片足を作り、その手順に沿って残りの片足を作った。これは、左右一組をなす対象物の性質を逆手に取る手順であった。さらに、靴紐へのこだわりも強く様々な紐状の素材を検討した後に、写真データのような作品として完成している。

造形表現において「観察から発見すること」もまた、「感性の一側面」と考えている。対象物を写実的に表現したいという「願望」であったとも考えられる。ここでは、造形遊びを通して自分なりに丁寧に観察し、受容・理解する行為に「感性の表出」が見い出されるのである。

ただし、学生の力には個人の差があることも周知の事実であり、ここでの成果が学生の標準的な造形力とは言い兼ねる。STEP3は上級編、応用編と位置付ける必要があるだろう。

写真5. くつ

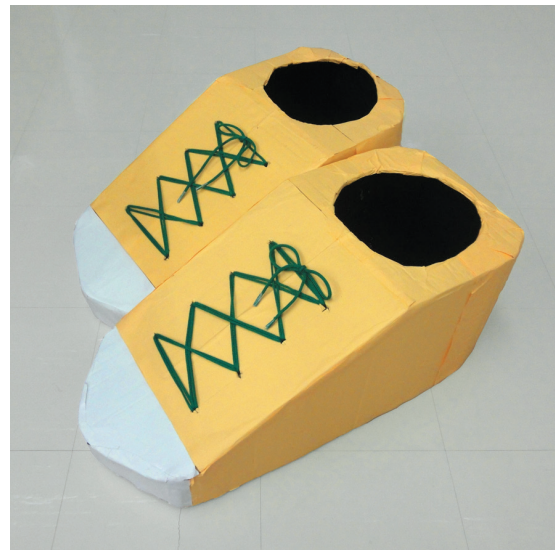


表3. くつの各寸法 (単位 cm)

	幅	奥行	高さ
片足	34	71	29
両足	68	71	29

5. 「共同制作」と「個人制作」

STEP2では、「共同制作」及び「個人制作」が展開されている。通常、これらは目的や目標が異なるため一つの課題で取り扱う事例は少ない。ここでは、同時展開の要因となる「共通点」と「相違点」を探り、「ツミキ・ワーク」の作用と効用を掘り下げる。

1) 共通点

創作活動は、本人の積極性が表現の源となるため、その活動に前向きな場合には「無意識に表現が大きくなる」という傾向が垣間見られる。例えば、お絵かきでは画用紙からはみ出す程に「描画範囲が広がる」等を指す。消極的な場合には、その逆となり易い。ここでの双方の作品は各寸法を見る限り、劇作品の大・小道具としては大きい部類に入ると言える。

「共同制作」「個人制作」で作用し得た要因には、4つの理由があると考えられる。

第1に、「積み木」というキーワードがある。学生達の中には、造形表現に対する苦手意識や悪印象をもつ者も少なくない。今回の「身近なおもちゃで発想する」

という制作方法により、制作活動への緊張感、抵抗感を軽減し、安心・安全に考えること、作ることが可能な支援及び補助ができたと推察される。

第2に、「シンプルな形」がある。学生達の中には、造形表現＝「複雑で緻密なもの」という固定観念が根深いようである。今回の「単純な形で発想する」という制作方法により、考えることへの不安・混乱・迷いを解消し、作ることへの意欲や態度に繋げることが可能な支援及び補助ができたと推察される。

第3に、「選択」という思考がある。学生達の中には、造形表現＝「無から有の創造」という固定観念も根深いようにある。今回の「知っている形の中から選ぶ」という制作方法により、考えることへの消極性を回避し、作ることへの積極性、活性化に結び付けることが可能な支援及び補助ができたと推察される。

第4に、「実技指導の重要性」があった。思い浮かんだ想像、イメージを美しく形作ることができなければ積極性の向上と継続は期し難い。今回は、第1から第3までの要因や、「作ろう・飾ろう」の分割式の制作工程を取り入れたことにより、考える時間を無理なく短縮し、理想や要望を実現する、作る時間を充実させることが可能な支援及び補助ができたと推察される。

2) 相違点

(1) 「共同制作」

「共同制作」で作用し得た要因には、「公平性の高さ」があると考えられる。

「大きなケーキ」の形に見る学生達の「感性」については先述の通りである。ここでは、色の観点から再度作品を見ていく。

「大きなケーキ」の特徴及び特性として、色の選択過程に見る「共感とその背景」から学生達の「感性」を読み取ることができる。

「大きなケーキ」の色を想像した学生達は、ピンクを共通イメージとした。画用紙の色見本を参考に想像の色に最も近いものを注文したが、印象と幾分食い違う「濃いピンク」が届いた。「色味が違う」や「美味しそうに見えない」等の意見が学生間で飛び交い、検討の余地もなく交換された後に、写真データの「淡いピンク」で色付けされている。ここでの「淡いピンク」という色合いから学生達の感性を捉え得るが、重要な点は、結果的に選択した色の内容以上に、問題解決に至る共感の背景にある。

このような共感が生まれた要因には、「公平な立場」が挙げられる。「濃いピンク」の問題に、多くの学生

から違和感が指摘され、その意見は広く共感を得ている。ここから、完成像の共有は勿論のこと、「共同制作」に関わる一員として学生の各々が感じたこと、考えたことを公平な立場で平等に発言し、議論し、尊重できる環境と関係が整備されていることが分かる。加えて、学生の一人一人が当事者意識を高く持ち、この活動に取り組んでいることも分かるのである。言い換えれば、「濃い・淡い」に関する色の意味に限らず、その問題から明らかとなった学生と学生の繋がり、そして「総意としての感性」に意義があると言える。

以上の「公平性の高さ」が生じる要因には、一人の統制者の手腕によるものではなく、自然に公平性が高まり易い「仕組みと環境作り」に起因するものであることを指摘しておきたい。

(2) 「個人制作」

「個人制作」で作用し得た要因には、「自由度の高さ」があると考えられる。

「とんかちC」の特徴及び特性として、作品の形状に見る「特異点とその着想」から学生の「個性」を読み取ることができる。

「A～C」の「とんかち」を制作した学生3名は、同時期、同教室で活動をスタートしている。「C」の学生も「A・B」の学生と同様に、「頭」を円柱体とし、対象物を再現しようと考えた。ところが、その制作過程で円柱体は「ハート型」という特異な形状に変化している。

このような特異点が生まれた要因には、「形の閃き」が挙げられる。段ボールで作る円柱体の簡単な制作手順は、1つの四角形で筒状の形を作り、2つの円形で空洞を閉じる方法である。この学生は、筒の形状を作るべく中芯に沿って段ボールを内巻きにする作業の中で、その形が一箇所を折り曲げるとハートのような形に変化することに気付いている。筆者は、造形表現の楽しさと喜びに触れるその姿勢や態度を尊重し、思い付いたことを試し、表すことを勧めるよう努めた。なお、変則的な形状であるため、理想的に作品化できる支援及び補助を行いながら、写真データのような「ハート型のとんかち」が完成している。

「A・B」を制作した学生は、制作方法を参考に自分自身が演じる役柄に想いを馳せ、空想の人物像を感じ取り「個性」を発露した。これに対し、「C」を制作した学生は、制作方法を参考にしながらも、手順や法則から一部離れて表現することで「個性」を発露したと言える。

以上の「自由度の高さ」が生じる要因にも、一人の教育者の手腕によるものではなく、自然に自由度が高まり易い「仕組みと環境作り」に起因するものであることを指摘しておきたい。

写真4. とんかち C



Ⅲ. 結果

これまでの分析と考察の結果をまとめる。

STEP1では、「ねらいの不一致」を指摘した。

STEP2では、美しさを感じ取る「感性」、及び独自性を表す「個性」が読み取れた。

STEP3では、観察から発見する「感性」が読み取れた。

共同制作と個人制作の「共通点」では、「積み木というキーワード」・「シンプルな形」・「選択という思考」・「実技指導の重要性」を指摘した。

共同制作と個人制作の「相違点」では、共同制作の「公平性の高さ」、個人制作の「自由度の高さ」を指摘した。

これまで述べた通りに、「ツミキ・ワーク」は幾何学形体を基礎とする制作方法である。だが、幾何学形体によって学生本来の発想や構想等の「考える力」を拘束・束縛するものではない。それは、感性や個性を表現する「きっかけの形」であり、またのびのび表現する「はじまりの形」である。

制作方法の手順や手法に則り、美しさや個性を表現することも一つの進め方であると同時に、制作方法に

自分なりに手を加え、美しさや個性を表現することも一つの進め方であると言える。

制作方法、或いは3つのSTEPさえも一つの「道筋」に過ぎず、進むべき方向性は学生達の「想いとイメージ」、そして学生達の「対話」によって、決定されるのである。

「ツミキ・ワーク」による成果物と制作過程、及び本論での分析と考察により、学生達の感性や個性を見出すことができた。或いは、学生達の感性や個性によって、「ツミキ・ワーク」の有用性が見い出されたと言える。

Ⅳ. 考察

造形分野において、本論で取り扱った「対象物を再現する造形教育及び能力」は、その解釈が分かれる領域でもある。

降旗孝は、山形大学及び付属学校園の大学生と小・中学生を対象に行った調査結果をもとに図工・美術への「意欲」を高め「苦手意識」を生み出さないために、問題となる傾向と認識を以下の3つにまとめた。¹¹⁾

- ・「うまく上手に作品を描いたり作ったりしなければならない」
- ・「手先が器用でない」「不器用だから」
- ・「イメージがわからないから」「発想力がないから」

以上のような苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究・開発として、14項目以上の実践的な試みを行っている。¹²⁾ なお、「上手・下手の呪縛から解放させること」や「うまさより自分の表現を目指すこと」を苦手意識を抱かせない要素の1・2に取り上げている点に注目したい。¹³⁾

他方、松下明生は総勢2272名の成人、大学生、短大生、小・中学生を対象に行った調査結果をもとに「お絵かきが嫌いになるとき」として、以下の5つにまとめている。¹⁴⁾

- ・思い通りに描くことができない。
- ・イメージがわからない。
- ・他人と比較して自分の下手さが分かった。
- ・友人、親、先生に笑われた、批判された、注意された。
- ・展示された。

また、『学生は幼児と違って18才以上である。(中略)大学生は「上手く描くことができたらいいし、美しさを求めても何も問題がなく、対象物を写實的に表現したいと思って行動する時期でもあるのだ。』と述べ、「上手い下手は関係ないからねと言える対象は限定されていて、先述した一部の段階(8才まで)の子どもたちにだけ言える言葉であるのだ。」¹⁵⁾と指摘している点に注目したい。

保育者養成における造形教育において「対象物を再現する造形教育及び能力」とは、どのように取り扱われるべきだろうか。

先行研究での指摘でも、第1に「メソッドによる指導法の問題」。第2に「学生の意欲・苦手意識の実態」。第3に「プロセスを重視した造形教育への傾き」があった。

第1の指摘は、対象物の再現に関する従来の指導方法と内容の問題点に言及するものであり、第2の指摘は、今後も慎重な議論を要する内容である。第3の指摘は、川口奈々子・吉岡千尋・竹内晋平¹⁶⁾が定義した「素材先行の活動」での有用性は高いと予測できるが、「主題先行の活動」での問題解決に直接関わるものではない。

以上の指摘から、2019年度『保育総合表現』の「劇創作」の大・小道具制作では、「対象物を再現する造形表現」の制作方法として「ツミキ・ワーク」を実施した。これに伴う本論の分析と考察の結果、美しさを感じ取る、観察から発見する「感性」や、独自性を表す「個性」が確認できた。

保育者を目指す短期大学の学生は、2年間という「短期集中型」の保育者養成教育課程の中で、保育現場の即戦力となるべく習得すべき様々な知識や技術の一つとして造形分野に関わる能力があり、その中の一つの領域として「対象物を再現する造形能力」がある。この力の本質的な習得は並大抵の努力で成し得るものではなく、また多大な時間と労力を要する専門的な訓練で身に付けることは非現実的と言わざるを得ない。だが、即効性の高い造形遊び(学びある遊び)により体験・経験できるなら、学習意義はあるのではないだろうか。少なくとも、「成功体験」を提供し得る可能性は高いと考えられる。

保育現場で子ども達に「上手く写實的に描くこと・作ること」を求める必要は、勿論ない。しかし、「対象物を再現する造形表現」に対し、「成功体験」「前向きな姿勢」がある保育者と、ない保育者では、お絵かきや工作活動への取り組み方・積極性に差が生じること

は必然である。なぜなら、それもまた造形分野の「土台の一つ」であるからに他ならない。

筆者は、「対象物を再現する造形教育及び能力」と「造形遊び(学びある遊び)」の関係性には、多くの可能性が秘められていると考えている。

今後の課題として、第1に、成果物の件数を増やすことが挙げられる。本論は、5件の作品から分析と考察を行ったが、より多い研究対象から検証する必要がある。また「再現が可能な対象物と、再現が不可能な対象物」についても明らかにする必要がある。第2に、「描画」への展開が挙げられる。今回は、立体物に特化して「ツミキ・ワーク」を用いたが、「円形・三角形・四角形等の平面的要素」に置き換え、「描画活動」での作用、効用についても検証したい。そして、この他にも制作方法を設計、開発すると同時に「保育者養成のためのEasy Art Education」の枠組みを構築することを最終到達点とする。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、御師事を賜りました森本玄教授(京都芸術大学芸術学部、旧京都造形芸術大学)に心より感謝申し上げます。

本論文を執筆するにあたり、英文抄録の作成に御協力を賜りましたCHOWDHURY Mahbubul Alam教授(福岡女子大学国際文理学部)に心より感謝申し上げます。

参考文献・引用文献

- 1) ポール・セザンヌ：【画家自身の言葉で綴る画文集】19世紀の画家たち - ゴッホ、ブレイクからゴッホ、ムンクまで。藤田尊潮訳：pp.83, 八坂書房。東京, 2009
- 2) キャサリン・ディーン：アート・ライブラリー セザンヌ。新装第1刷。pp.125, 西村書店。東京, 2010



「サント=ヴィクトワール山」 ポール・セザンヌ 油彩・カンヴァス 65×81.5cm 1904～06年頃 チュールヒE・G・ビュールレ財団

- 3) 智原江美, 鍋島恵美, 和田幸子, 下口美帆, 田中慈子：幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成のあり方 - 京都府南部の幼稚園・保育所へのアンケート調査からの検討 -. 京都光華女子大学研究紀要. 53 : 122-123, 2015
- 4) 松下明生：幼児の領域（表現）と小学校課程（図画工作科及び生活科）との相関について - 学習指導要領に見る造形分野に於ける指導法の関連を探る -. 柳城こども学研究. 1 (1) : 22, 2018
- 5) 島田由紀子：幼児、児童のメソッドによる描画指導法の研究. 和洋女子大学紀要. 57 : 87-96, 2017
- 6) 降籙孝：図画工作・美術への〔意欲〕・〔苦手意識〕の実態と考察 - 児童・生徒・大学生の実態調査結果から -. 山形大学紀要 (教育科学). 16 (2) : 109-123, 2015
- 7) 日名子孝三, 長谷川悦子：造形表現に於けるイメージ展開と苦手意識について. 文京学院大学人間学部研究紀要. 17 : 1-12, 2016
- 8) 花田嘉雄, 樋口健介：図画工作の授業前後における短大生の造形分野に対する意識変化調査. 羽陽学園短期大学紀要. 10 (3) : 105-112, 2017
- 9) 川端強編：グリムの昔話 (1) 野の道編. pp.160-165, 童話館出版. 長崎, 2007
- 10) 中野友三：幼児造形表現の見方、育て方 - 大人のかかわり方の観点から -. 比治山大学短期大学部紀要. 37 : 21, 2002
- 11) 降籙孝：図画工作・美術への〔意欲〕・〔苦手意識〕の実態と考察 - 児童・生徒・大学生の実態調査結果から -. 山形大学紀要 (教育科学). 16 (2) : 119-120, 2015
- 12) 降籙孝：苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究・開発 - 図画工作・美術に対する苦手意識解消の試み -. 山形大学教職・教育実践研究. 13 : 33, 2018
- 13) 降籙孝：苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究・開発 - 図画工作・美術に対する苦手意識解消の試み -. 山形大学教職・教育実践研究. 13 : 34-35, 2018
- 14) 松下明生：描画行動への好悪心理の起因に関する研究 - 幼児の造形表現と図画工作及び美術科教育法等への芸術心理側面からの問題提起 -. 日本福祉大学子ども発達学論集. 12 : 15, 2020
- 15) 松下明生：描画行動への好悪心理の起因に関する研究 - 幼児の造形表現と図画工作及び美術科教育法等への芸術心理側面からの問題提起 -. 日本福祉大学子ども発達学論集. 12 : 14-16, 2020
- 16) 川口奈々子, 吉岡千尋, 竹内晋平：素材を実感的に理解することを意図した「幼児の造形表現（保育内容の指導法）」の実践 - 和紙と水糊による「Dried drawing」の体験を中心に -. 次世代教員養成センター研究紀要. 5 : 126, 2019

Easy Art Education for Childcare Worker Training
–Analysis of Props Production by "Tsumiki Work" of Dramatic Creation in
"Childcare's Expression"–

Kimihiko Washizaki *

<Abstract>

As a first step in building the framework of “Easy Art Education for the training of childcare workers.” It will analyze and consider the student deliverables of “Tsumiki Work”, which was conducted in the production of large and small props for “dramatic creation” in 2019.

“Tsumiki Work” is a method of producing “An artistic expression that reproduces an object” based on Paul Cezanne’s art theory, who is the father of modern painting, and applied to the educational toy “block”.

It has classified the research object in three STEPs of “Tsumiki Work”, the characteristics of works and processes are analyzed and considered, and explore their usefulness. Also, the works in the second step are classified into “collaborative production” and “individual production”, and the possibility of “Tsumiki work” is grasped from the common points and the differences.

As a result, the analysis and consideration, in the second and third steps, “sensitivity” of feeling the beauty, discovering from observation, and the “individuality” of uniqueness. In addition, we have clarified four advantages from the “common point” of co-production and individual production, and “high fairness” and “high degree of freedom” from the “difference”.

Keywords: childcare worker training, artistic expression, reproduces, Tsumiki Work,
Easy Art Education

* Department of Early Childhood Education and Care, Seinan Jo Gakuin University Junior College

